

共同利用・共同研究課題『文法の動的体系性を探る（1）：文法の多重性と分散性』（平成29年度第1回研究会）報告

*当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

日時：

平成29年 10月7日（土曜日）午後1時より午後6時
10月8日（日曜日）午前10時より午後2時

場所：AA 研405号室

【概要】

初年度第1回である今回の研究会では、以下をめざしました：

- ・ 「文法の多重性」に注目する視点、それに至る問題意識などについて共有し、共同研究プロジェクトの趣旨を確認すること
- ・ 基盤となる論文とケーススタディに関する議論を通して「文法の多重性」に関するモデルを確認すること
- ・ 参加者の研究の中で気がついた言語パターンのジャンル差・多様性などを共有しつつこれからの議論の方向づけをすること

【プログラム】

10月7日

1. プロジェクト趣旨説明：中山俊秀（AA 研所員）
2. 「多重文法（Multiple Grammar）モデル概説とその理論的意義」：青井隼人（AA研特任研究員・国立国語研究所）
◦参考文献：Iwasaki, Shoichi. 2015. A multiple-grammar model of speakers' linguistic knowledge. *Cognitive Linguistics* 26 (2): 161-210
3. 「日本語の日常会話から見る文法の多重性」：堀内ふみ野（慶應義塾大学大学院）
4. 言語パターンのジャンル差・スタイル差の実例の発表（1）
使用環境（書き言葉・話し言葉、異なったジャンルなど）によって構造規則・パターンが異なる事例（使用のドメインやコンテキストなどと連動した文法パターンや使用形式の分布・用法のばらつきの例）を共有した。注目した側面は、音声・音韻；形態統語法：観察される文法規則とその分布の異なり；意味用法の分布；語用論的規則；文法変化；使われる語彙；観察される構文・定型表現など。
◦高梨博子（日本女子大学）
◦堀内ふみ野（慶應義塾大学大学院）
◦加藤昌彦（慶應義塾大学言語文化研究所）
◦大谷直輝（東京外国語大学）
5. オープンディスカッション：文法の多重性が提起する問題

10月8日

1. 言語パターンのジャンル差・スタイル差の実例の発表（2）

2. オープンディスカッション：文法の多重性を踏まえた文法研究を考える

*発表資料は以下のプロジェクトサイトを御覧ください：

<https://sites.google.com/site/toshinaklab/coproj/prjmultig/mtgs/mtg17-01>

【議論と論点】

今回の研究会での話題提供に関する質疑やオープンディスカッションにおいては、特に以下のような点が、さらに議論を深めるべき問題として浮かび上がりました：

- ・ 「文法」は本当に「体系」をなすのか、それとも単に collection of choicesにすぎないのか
- ・ 話し言葉と書き言葉は別の体系をなすというが、その体系の組み上げ方はそもそも同じなのか。体系の構成自体が質的に違うということは考えられないか
- ・ Iwasakiのモデルではジャンル別の文法にまたがる統一的知識体系として Conceptual Grammarが想定されているが、それは本当に必要なのか・あるのか。もしあるとするならばどのような情報が入るのか
- ・ ジャンル別の文法知識は混ぜたり、組み合わせたりできるが、それは文法知識体系の作りの特性の話なのか、それとも知識運用のあり方の話なのか
- ・ 文法体系上の差異とスタイル上の差異は質的に異なるのか。区別できるのか？